

見附市における豪雨災害と新潟県中越地震に関する報告

(小坂井保子、訪問看護と介護 2005; 10(2): 95-101)

2018年7月13日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

➤初めに

2004年は全国各地で大規模な自然災害が発生した。新潟県でじゃ、7月上旬に発生した集中豪雨による水害、10月に発生した中越地震によって大きな被害を受けた。見附市でただ1つの訪問看護ステーションである訪問看護ステーションみつけでも経験を記す。

➤訪問看護ステーションみつけについて

平成11年に開設し、約100名の訪問看護利用者と、約60名のケアマネジメントの利用者を常勤看護師5名(ケアマネージャー兼務は4名)、非常勤3名で訪問している。特別管理加算がついている人が40%を超える。

➤見附市豪雨災害について

2004年7月13日、活発な梅雨前線がもたらした集中豪雨により、新潟県内では大きな被害が出た。13日は豪雨のため予定を繰り上げながらできるだけ訪問を行った。14日は施設職員、利用者の安否確認を電話の繋がりにくい中行い、夕方までにはほぼ全員の安否が確認できた。15日は天気も回復したため、通常の訪問看護業務を再開した。また近隣の避難所でのボランティアを開始した。その後は通常の訪問看護業務と並行して避難所での救護活動を行う。

➤新潟中越地震について

2004年10月23日17時56分、新潟県川口町で震度7を観測する地震が発生した。見附市でも震度5強を観測した。23、24日はスタッフ、利用者の安否確認に追われた。25日改めてスタッフの安否確認を行い可能であれば水筒にお湯を入れて持ってくるように依頼した。温かいタオルで保清をしたことは利用者に非常に喜ばれた。26から28日も同様のことを続いた。10月29日から11月2日、余震は次第に少なくなっていたが、まだ多くの避難者がいた。健康相談業務を行うこととなった。

➤反省点と今後の対応

2003年に、県の看護協会立ステーションで検討して災害対策マニュアルを作成したにも関わらず、事務所で細かい申し合わせがなされていなかったため、あまり活用できなかった。水害後、さっそく備品と整備と申し合わせを行った。

情報伝達の問題も生じた。災害時の情報は市民全体に知らせる必要があったが、今回は勧告がでた地域にいた人にしか伝わらなかった。市全体を網羅する防災スピーカーの設置など、市の対応が必要だと思われる。また、今回は他事業所からの情報で避難勧告が発令されていることを知ることができたが、今後は日頃からの他事業者などとのネットワークと、事前の情報伝達システムを検討する必要がある。

安否確認の方法でも、普段から利用者家族の携帯電話など、複数の電話番号を聞いておく必要性を痛感した。

災害時のステーションの役割は、利用者の安否確認と安全管理、そして必要な看護が滞りなくできるように可能な限り配慮することであると思われる。さらに、ケアマネージャーとしては、避難先や復旧後に利用者が安全に生活できる場所の確保が急務である。また、地域における看護職としての役割が果たせるよう、救護ボランティアや病院へのボランティアも積極的に参加していきたい。